

となく、保存的療法で改善が認められた。

本症例は糖尿病に関する知識の欠如により重篤かつ広範な合併症への進展した症例であり、さらに糖尿病啓蒙の重要性を強く考えさせられた。

### 9. C型肝炎におけるインターフェロン療法の評価 (消化器病センター内科)

渡辺 麗・谷合麻紀子・小林 潔正・  
石黒 典子・徳重 克年・長原 光・  
橋本 悦子・奥田 博明・山内 克巳・  
久満 董樹・小幡 裕

〔目的〕C型肝炎に対するインターフェロン(IFN)療法に関して、当科での経験例を評価検討する。

〔方法〕1988年7月より現在までIFN療法を施行した20例に関して治療効果について検討した。対象は急性肝炎遷延例7例、慢性肝炎13例である。慢性肝炎例は、組織学的にchronic persistent hepatitis (CPH) 2例、chronic aggressive hepatitis 2A (CAH2A) 10例、chronic aggressive hepatitis 2B (CAH2B) 1例である。IFNは、天然型 $\alpha$  11例、recombinant  $\alpha$ -2a 6例、天然型 $\beta$  3例であり、総投与量は、64~734MU(平均24 MU)である。治療効果判定として著効：観察期間中にGPTが正常化、有効：観察期間中にGPTが正常上限の2倍以下に改善、悪化：観察期間中投与前に比して明らかに増悪、不変：上記に属さない例とに分類した。

〔結果〕(1)急性肝炎遷延例7例に関しては、5例が著効を示し、6例でHCV-RNAも消失した(1例はHCV-RNA未検)。(2)慢性肝炎13例に関しては、薬効例4例(31%)、有効例3例(23%)、悪化例0例、不変例6例(46%)であった。CPHでは有効例1例、不変例1例、CAH2Aでは著効例4例、有効例1例、不変例5例、CAH2Bでは、有効例1例であった。有効例と無効例との比較では、有効例は投与量、投与方法、組織学的に明らかな差は認められなかった。

〔考察〕C型肝炎において約半数の症例ではIFN療法が有効であった。しかし、一方では半数の無効例があり、今後はこれらの症例にいかに対処していくかが問題であろう。

### 10. 生体部分肝移植剖検症例の病理形態学的検討

(<sup>1</sup>)第一病理, (<sup>2</sup>)第二病理, (<sup>3</sup>)病院病理科  
(<sup>4</sup>)消化器内科, (<sup>5</sup>)第三外科)

○小林槇雄<sup>1</sup>・笠島 武<sup>2</sup>・河上牧夫<sup>3</sup>・  
豊田智里<sup>1</sup>・西川俊郎<sup>2</sup>・橋本悦子<sup>4</sup>・  
小幡 裕<sup>4</sup>・寺岡 慧<sup>5</sup>・太田和夫<sup>5</sup>

生体部分肝移植後に死体肝移植が行われた剖検症例について病理学的立場から解析と考察を行った。

〔臨床経過〕59歳女性。肝硬変に対して、長男からの肝移植を受けた。本人の肝組織は乙型進展型の肝硬変であった。術後、一時改善傾向のみられた黄疸が増強、エコーで門脈内血栓と確認された。第13病日施行された肝生検組織には、胆汁鬱滞と血液循環の不全を示した。翌日、肝動脈、門脈血栓にて移植肝の摘出と死体肝(ベルギー人)の再移植が緊急に行われた。移植前の供給者肝は構造は保たれていたが、肝細胞の淡明化をみた。摘出された第1回目の移植肝は広範な肝細胞壊死に陥っていた。第18病日、心不全状態で死亡した。

〔剖検所見〕147cm, 68.5kgの黄疸高度の女性屍。黄色を呈し、腫脹した肝臓(1,137g)には吻合不全、門脈血栓、胆管の閉塞は認められなかった。組織学的には瀰漫性の肝細胞の脂肪変性と細胞変性が認められた。門脈域には軽微なリンパ球浸潤のみみられた。第2回移植肝には、浸潤細胞の関与に乏しく有意な免疫組織化学的な表現は現在のところ観察されていない。また、真菌やCMV感染の所見は認められなかった。

〔考察〕死亡時の肝には、移植後の時間の経過の短いこともあり、拒絶反応を示唆する免疫担当細胞の浸潤と抗原の表現に乏しく、肝細胞脂肪化を認めた。後腹膜および腸間膜領域のリンパ節には濾胞消失とリンパ球の減少ならびにカポジ類似の血管増殖があり、高度の免疫抑制状態におかれていたことが示唆された。

#### 〔教育講演〕

#### 臨床医学に必要な統計の知識

(東京大学医学部 健康科学・看護学科  
疫学生物統計学教室)

大橋 靖雄

臨床研究において統計的な考え方の重要性が指摘されるようになった背景には、増加の一途をたどる研究情報の中で、個々の研究の質を評価する上で方法論がキーであることが広く認識されるに至ったこと、説明と同意の考え方の普及や臨床研究の長期化・大規模化の中で、獲得する情報の質と量を上げるためには研究計画が本質的であり、研究計画の中で統計的側面の重要性が認識されるようになったこと、コンピュータの普及もあり高度な統計手法が常識化しつつあることなどが挙げられる。このような背景と生物統計学の発展の経緯を踏まえ、研究計画の統計的側面、臨床研究によく見られるバイアス、コミュニケーションに必要な統計の概念について述べる。